シャーリング機を更新

ベストスチール 生産効率化

更新したシャーリング機。板厚最大6.5ミリに対応

有力コイルセンター、藤澤鋼板（本社＝千葉県浦安市鉄鋼通り、藤澤丈社長）の関連会社でシャーリング加工を手掛けるベストスチール（同、藤澤鐵雄社長）は今月、シャーリング機1基を更新した。老朽化更新が主な目的だが、既存機から実質的な対応板厚が拡大したことで、自社の品質・生産性向上に加え、シャー母材を供給する藤澤鋼板のレベラーラインとの連携向上にもつながっている。

レベラーと加工連携向上

更新したシャーリング機はアマダ製「DCT－1265」。板厚0・6－6・5ミリ、板幅最大1270ミリに対応。バックゲージは最大1000ミリ、パイラーは最小400ミリ。

入れ替えに伴い撤去した既存機は板厚最大6・5ミリまで加工できる仕様だったが、老朽化を考慮し、6ミリ以上の加工は厚物用のシャーリング機で対応していた。今後は新鋭機で対応できることから、平準化によるリードタイム短縮や残業時間の削減も見込める。

同社は全5基のシャーリング機を保有。板厚最大12ミリの1号機、同14ミリの4号機など、厚板を切断できる設備もそろえている。向け先はトラックが最も多く、建設機械、建築、鋼製家具なども手掛ける。ベストスチールの藤澤鐵雄社長は「供給責任を果たす上で重要な役割を担っており、安定供給継続のためにも、シャーリング加工賃の是正を引き続きお願いしていきたい」と話している。